

にツ／＼とお通りになります。此の先拂の風態は浮世柄の大小鞆小絞の脚絆甲掛け尤も一文字笠、これが先を拂ふて参ります。後方へ執行持ちと申しまして御弓の飾つたのが二十挺、お鐵砲の飾つたのが二十挺、其の後へ先箱、その後が、お箋箱、お具足櫃、それから飾馬、お太刀箆、お具足櫃の執平返し、之が金絞先箱それからお手道具大鳥や小鳥や、紀伊家に於きましてお家に傳へ来ります大鳥毛、紀伊家の名物と云ふお天目鎗、これが三間以上も御座ります。此の大鳥毛を振りますのがお手許奴のみ。そで仲々自慢の一つで、多勢の奴に見て置くと云はぬばかりに振るので御座ります。此の奴に聲を掛けますのが却々六ヶ敷いので家康公江戸城へ御入城の節に、表門からお這りなくして其の日の御都合が如何云ふものか赤阪御門から御這入りになりました處から、此の行列の奴をば赤阪奴と稱へます。凡て其の日は天赦日で御座りますので御案内の通り此の天赦日は吉日で御座ります。それを祝ひまして赤阪奴が聲を掛けますので

「ヒ……サア……ヒ……ヨ……イ……ヒ……シア……ア……ナア……」

と云ふのをば聲を揚げますので「よいひぢやなア」と云ふ事が耳にはさう聞えませぬ。

「ア……ア……ヨ……イ……ヒ……ヤ……ナ……ア……」

さて其の後へお乗駕が参ります。お手道具は御家門附それ／＼御家老が御供行列家老の御道具が行くと云ふ様な順序になつて居ります此の行列になりますと如何にワイ／＼云ふて居りましても俄に靜に

なります。まるで大道に水を撒いた様にシーンとします今生れる赤子でも一時は見合はすと云ふ位でやう／＼御機嫌麗はしくお芽出たく御入國に相成りました。さて紀伊大納言頼宣公御城内に御着きになりましたが、吾々で御座りましたら東海道五十三次旅の疲れと云ふので、さア風呂へ這入りまして一杯飲んで二、三日は草臥休みにゆつくり手足を伸して寝ますが、御大名はそう云ふ譯には参りません。早速一家中の者が總登城と云ふのでお目通りを致します。正面の御唐紙が開きます時には敬蹕の聲と申しまして、シートと聲が掛ります(上の舞)御殿様が御着に成りますと

「我君には御機嫌麗はしき、御尊顔を拜し奉り々萬々御芽出度存奉ります。」

「三浦藏之助を始め其外一家中之者出仕大儀、今日其方等に訊ねる仔細あり心得有る者は逐一返答に及べ。」

「ハ、ツ。」

「予が領分に筈ヶ島と申す處有りと聞き及ぶが未だ予は其島を心得ず筈ヶ島と云へる處は何れにあるか具に語れ。」

「ハ、ツ、其儀は御城下西南に當つて西は阿波の海に續き東は加太の岬、凡て東西二里南北一里半も有ると云へる島、昔より人蓄寄る處にあらず禽獸諸鳥の住所と相成り居ります。」

「何故其島を筈ヶ島と名附けしぞや。」